五ツ又自治会だより53

平成27年8月号
発行日　2015/8/15
発行人　新井正司
編集人　広報部　岡　和男

今年のまつりは一言でいうと熱い

今年の五ツ又まつりは8月1～2日、五ツ又森の公園で開催されました。参加者はおよそ2000名強、例年と同じくらいの人出でした。

今年はあえて梅雨明けを狙って例年より２週遅れての開催。毎年のまつり中の大雨に懲りましたから。でも今年の夏は高温の連続です。日中の異常な高温は８月２日の山車・神輿巡行では参加者は大変でした。神輿の休憩地では飲料の需要は高く、それでも足りずに水道ホースからの水を頭から体中に浴びて涼を取るシーンが見られました。

少子化の影響もあり、山車は曳き手が小学生１～３年ですが、曳き綱の半分くらいの員数。まつり保存会員が山車や子供神輿巡行の世話をしますので、大人神輿は定員ぎりぎり、武蔵野自治会からの10名の応援を得て巡行したくらい。これを少大人化とでもいいましょうか。

子供神輿は２基ありますが、１基は小学高学年が主体、もう１基は自治会内の参加者では足りず、高北小のサッカー部の応援をいただきました。今回は参加いただけなかった五ツ又の子供たちは結構いるはず。新しく自治会に入られた大人の方にはどう参加すればのかわからない人もいるはず。この掘り起こしが今後の課題かも。要は人間関係の熟成ですよ。あの人気の東京神田祭でも、町によっては神輿を庫から出さず、出しても駐車場の奥、自動車の向こうに据えたっきりという状況があります。１町会30人程度の老齢の住民では神様に奉仕する人がいないからです。

盆踊りは今年も上質。主体は北小ウィングのお母さんたち。６曲を３日間のレッスンで集中に次ぐ集中、完全制覇。驚きの上達です。人前で見せる目的がありますからこれがモチベーション？　これに踊り好きの方たちが加わって踊りの輪は今年も２本。川合市長は毎年お見えになりますが、今年は盆踊りにもご参加。炭鉱節は手慣れていらっしゃったようです。

模擬店での商品は昨年とほとんど変わりませんが、今年はかき氷が評判。腕が上がったか、機械がよかったか、どちらかあえて申し上げませんけど。そうそうまつり保存会店で新製品を見つけました。焼きおにぎりです。まかない飯からの発展だそうです。タレが醤油でなし、味噌でなし、焼き鳥のタレに思えたのは私だけでしょうか。

暑いさなか、巡行の沿道で熱い日差しをものともせず、山車・神輿の通過、到着を親子で待ちわびている姿をあちこちで見かけました。盆踊り会場は家族との触れ合いの場です。豪勢な山車や神輿は都会の大きな祭りで見られますが、地方の小さな街で今どれほどの山車・神輿が動いているでしょう。その点わが街の夏の風物詩、五ツ又まつりは手作りでとても魅力的。この時代、幼少期に夏の風情を味わえる五ツ又っていい街です。

来夏はいかなる気候になりますか。最後の雷雨は恒例の余計ものでしたね。

あれ、いつもと違う入賞者…ボウリング大会

6月12日、ふじみ野市イーグルボウルで恒例五ツ又自治会ボウリング大会が開催されました。参加人数は約40名でした。

優勝者は大人の部では

優勝　藤谷　啓、準優勝　山越正巳、三位　宇津木美奈子。

子供の部は

優勝　須賀柚心、準優勝　平野裕大、三位　島田龍聖（以上敬称略）。

あれ？大人の部の入賞者にいつもの人がいない。そう今回は隠れていた優秀なスポーツマンが初参加（発掘）されたのです。

この大会は認知度がまだ低いのです。人は言います「そんなことしてたの」。してましたもう何年も。優勝する可能性は皆さんにあります。回覧をご覧いただけていないようで、これからは口コミだ。

今年の敬老の日の集いは面白そう

今年の敬老の日は9月12日（土）ジョイフルで開催されます。第1部は「唄と踊りと三味線と太鼓」と題して大ホールで演奏会です。津軽三味線をはじめとした日本の古くて新しい音楽をコンテンポラリーダンスと伝統の融合でお届けします。

演奏者は津軽三味線・唄が澤田邦櫻（写真左）、唄・おどりが尾形直子（写真中）太鼓が小澤さと（写真右）、の以上3名。3人が繰り広げるの伝統音楽の旅はいかが。どなたでも年齢・自治会内外を問わず無料で参加いただけます。

第2部は70歳以上の方が対象の会食会で、応募者はご招待いたします。事前に回覧で募集します。お見逃しなく。

寺尾河岸（五反田）が散策路に

川越江川の新河岸川合流部、寺尾中、寺尾小、元福小などに囲まれている旧字五反田はもともと湿地帯で舟運盛んな頃は寺尾河岸が置かれていたところです。明治になって舟運が廃止されたのち昭和10年、五反田として農地にされましたが、洪水予防のため昭和57年に治水対策が策定され、その後遊水（調節）地となりました。

それ以来、他の調整池とともに新河岸川の氾濫に備え、平成11年8月の洪水の際は他のその力を遺憾なく発揮したと荒川上流河川事務所HPは言ってます。高さ3mほどの築堤に囲まれた遊水地内はあまりに自然がいっぱいで中に入るのは憚られますが、長さ1㎞弱の築堤の上は格好の散策コース、目より高い位置に何も構造物がないので空がとても広い。川が近いので流れる風も涼しいのでしょうね。この遊水地内に、この秋市と県の共同で木道が敷かれます。ぼうぼうの草も刈られるとのこと。今でも近所の方は散策コースとされているようで歩かれてます。築堤上は自転車など乗用禁止ですから木道上もそうなるでしょう、安心して歩けます。晴れた日は夕日がきれいと言われています。

どんな風景になるの　新河岸駅前開発

昭和50年代初期の新河岸駅はというと、駅舎は秘境駅風情。左側に東武鉄道の保線資材置場がありました。今の東武ストアとその側道の位置です。ホームは島式でしたが跨線橋がないので、ホームに進むにはホームと駅舎を結ぶ駅内の踏切を渡ります。踏切があっただけすごいか。下り電車が来ると踏切が閉まります。その時上り電車が来たら乗れません。列車本数が少ない時代でした次の電車を待つなんてことできません。いい時代でしたね運転士と駅員が踏切が開くまで上りの列車を止めて待ってました。駅の入り口が西側1カ所なのは今も同じ。若者にとって出入口が両側にないのは友人との会話でかなりのストレスになっているようです。「どっちの口で降りるの」と言われるのが辛い。新河岸駅はいつも東上本線の他の駅に遅れを取ってます。エスカレータ・エレベータは遅く設置、列車案内表示装置は最新になるまではいつも別の駅のお下がりでした。駅舎の改築も越生線各駅に引けを取る始末。新河岸駅って可哀そう。シンデレラみたい。
それが平成30年度内にどうなります。これがあの新河岸なのとでも言われそう。

まず駅は橋上化され、改札口から自由通路を使って駅の東西に出られます。エレベータもエスカレータも増設です。東西各出入口にはロータリーができます。以上規模は小さいですが、ふじみ野駅のようになります。駅前の同じエリアを人・車・自転車が共有することはまずなくなるでしょう。ホームは川越寄りに移動します。
詳しくは駅ロータリー工事現場の看板をごらんください。
今の料金体系では、この移動により池袋からの運賃が上がることはないようです。

自治会高階支会では、竣工に際して行事を計画しています。何をやるかは未定です。
お楽しみ。

井戸端の友
あいさつ代わりの話のネタ

キスミーの紅

第2次大戦後、10年もしないうちにラジオでは化粧品の宣伝が始まっていました。まだ食料の入手がままならない時代です。そんな物資不足の時期にでも化粧品の需要があった、女性のフェイス、ボディケアの欲求には頭が下がります。

黒ばら本舗のネオポアン、加美乃素本舗の加美乃素、ウテナ化粧品のクリーム、桃谷順天館の明色アストリンゼン、オリヂナル薬粧のももの花、どれもこれも私くらいの年ごろには懐かしい言葉です。ここで挙げた各社は今も健在です。これらの化粧品会社の中でキスミーは強烈でしたね。マスメディアでは堂々流通していたブランド名です。しかし今と違って「キス」なんて言葉は子供にとっては禁句でした。私などは小学校の音楽の授業でスキップを練習していた時に、ちょっと口が滑ってキスップなどと言ったばっかりに1時限、廊下に立たされたことがあるくらいです（昭和30年ごろの話）。

以前地元の古老に藤間に「紅屋」の屋号を持つ家があったと聞きました。図書館で見た古い地図に、旧道の西の畑の中に、たしかに一軒家で「紅屋」がありました。しかし、その他に資料がありません。実際にはどこのお家かわかりません。砂新田から見て東光寺の先と言うことでした。東光寺に伺いましたがわかりません。たまたま墓参に来られた下赤坂の方が「坂を下りてすぐの右側だ」とっおっしゃるのですが、看板があるわけでなし、今の景観では屋並みが多く立ち並んで判別不能です。

そうこうしているうちに、江戸で紅屋を開業した方は藤間の出身であり、その末裔が東光寺に墓石の調査に来たことがあるとの情報が入りました。ということはどうやら藤間の紅屋とは別の存在のようです。現に藤間に住んでいる方がわざわざ調査に来るはずがありません。誰でしょう。藤間の紅屋は後段において。

さて江戸時代に江戸で名声を博した紅屋で有名なところと言うと私が知っているのは「伊勢半」だけです。平成15年ごろ、江戸開府400年記念行事のひとつとして神田の神保町の靖国通りに伊勢半の紅資料館があったのを思い出しました。早速伊勢半のHPを見ました。そして確証しました。だって現会長のお名前が藤間に多い「澤田」氏なのですから。そして「伊勢半」の持つブランドのひとつが忘れがたい「キスミー」です。

神田神保町の元紅資料館

伊勢半の創業者は澤田半右衛門氏です。寛政2年（1788）年、川越藤間の生まれで、少年のころ江戸日本橋の紅白粉小間物屋に奉公に入り、文政8（1825）年37歳（諸説あり）の時に伊勢屋（呉服屋）の株を買い、日本橋小舟町に「伊勢半」を開業しました。製造販売した商品は口紅です。口紅は京都が主流でしたが、江戸時代のこの時期になると江戸で製造されるようになったとか。原料は山形の紅餅（紅花）で、独自に技法で加工し「小町紅」の名で販売しました。この紅の特徴は人の肌の色によって発色が異なることと、ある厚みで塗ると緑色の蛍光色（玉虫色）がでることです。もともと紅花が原料ですから高価ですが、それをさらに厚く塗ると緑色に見える、そうできる人はよほどのお大尽だろうという見方ができます。憧れが消費者の心をくすぐる商品です。参考までに紅の色の成分は（R=214,G=0,B=60）です。できる方はウィンドウズの「ペイント」で再現してみてください。官能的な色です。

農業に向いた土地とは言えない耕作地しかないが、しかし川越と言う一大商業地を近くに持つ高階と言う土地では、生きるために、先人達は舟運業・綿織物などさまざまな事業に取り組んだ。その意気地がここにも垣間見えます。

半右衛門氏の墓所は東京にありますが、東光寺の墓地にある父上の墓石の横にも彼の戒名があります。兄の澤田清吉氏の計らいによるものだそうです。今はちょっとみにくい位置でありますが。

ところで古老の言った藤間の紅屋は旧道沿い松本医院並びの松本氏でした。もう代が代わられて詳しいお話は聞けませんでしたが、生産されていた紅はムラサキの根から精製したものだったようです。染料なのか口紅なのかまだ未調査です。

五ツ又だよりのバックナンバーは五ツ又自治会ホームページの「自治会報」でご覧いただけます。五ツ又自治会ホームページへは　http://www/itutumata.jp/ あるいは「五ツ又」で検索下さい。